へ14 2690 19
へ14 2690 20
へ14 2690 21

其名高名
妻婦の小傳
東海奇聞

七編上

へ14
2690
19

へ14特
2690
19

其名も高橋毒婦の小傳

東京奇聞第七編序

のゝ面白き春雨やナ花を散さぬ程にふれと茶道梅林が豊太閤の物ゝ溺るゝを諷諫したる口吟けく凡そ物と愛ちる其度ゝ過ぎゝ之と惑溺とつゝて害を嘯らぬ者ちゝ殊に女色を愛ちるゝきい少く其度を過る時ハ身を誤り溺るゝ時ハ家を亡ちゝ至る痛く戒めずんバあるべからず今此書を閲するに阿傳が色ゝ溺れて身を害せし者幾人ぞ是阿傳が奸智陽ゝ貞操節義を飾り陰に女惡邪毒を逞しゝ巧に人を欺き輙く財を奪ふ其人自ら嘯らざるハ徒らに其色ゝ溺色て恋を失ふゝ雖も亦

阿傳が尋常の婦人と異なる所ある此書ゝ於て判然たれど只其紀事の淡白にして與の薄きハ勉く其實蹟を綴て毫も架空の説を雜へざる我新聞記者の本色にして彼戯作者流が事実ゝ離せば無稽妄誕奇説珍事を附會せ草紙物語と異なる所あれば寧ろ岡本子が本業の餘暇之を草創し余も亦燈下ゝ之を訂正潤色し此この看客をして倦ざらしめん事を要せしが同時に類板の世に出ると以て書肆其発兌を急ぎ全部七帙僅ゝ六旬にして業を卒ゝ斯の如く迅速なるゝ故に十分校閲の暇ゝ乏しく其履歴の未だ悉ざる所あるも亦編帙其度ゝ過てあらゝ面白やと喝采五ふ看客の退屈を招こん事を恐れ巻をちゝきめ程ゝ其局を結ぶ事とハなりぬ

明治十二年四月上旬
東京新聞社ゝ於て

芳川春濤題

毒婦高橋阿傳之肖像

お傳が殺されてから後のことを考へると
思ふ毒悪
ことのあらましをかくそこなはれたるもあらぬ人をむ苦しさ
獄屋につながれまして
獄やれてゝ故郷
時しきりに紀と夢るあり
書文を面者しちゝとんとある
ふと思ふ駅のんを泥むるにぬるまわめと汝をく問ぶれき
口供を細ゝ申せ一時ちゝ
ちがいなく殺こゝ殺き世ゝ
刑場に引出され一時よあり
なるきまのくあを結ゝ一時あれべき命まきゝ

宣告之寫

群馬縣下上野國利根郡下牧村
四十四番地平民九右衛門養女　高橋でん　三十年七ヶ月

其方儀後藤吉藏の死い自死にして已れの所為に非ざる旨申立ると雖も

第一　右吉藏を殺害せし云々書置及當初警視分署并に明治十年八月十日

紀同判事に於ての供狀第二醫員の診斷書第三今宮秀太郎の申供第四旅

店大谷三四郎等の申供第五宍倉佐七の申述諸衆証ふ依るに自殺ふあら

ざる事明白なりしに而して廣瀨某の落胤或ハ異母の姉の復讐をうとつひ

又ハ姉在世の景況及須藤藤次郎等を証據人といふも果して姉の生所等

一も認むべき徵憑なし是畢竟名を復讐に托し自ら賊名を匿さんためふ

出る遁辭なるものとして此に因て之を見るに徒ふ艶情を以て吉藏を欺き

財を圖る遂る能はざるより豫め殺意を起し剃刀を以て殺害し財を得

る者と認定す因て右科人命律謀殺第五項に照し斬罪申付る

明治十二年一月三十一日

○宍倉佐七い吹夜あ傳ゞお法臣に出さきく今ふ取つてすぬいとう」と事ゞ先き糊所の人長門ゞ秋狹の者ゞ集てある西ゝお傳ふ一寸来てゝと仕ひもあてゝゝ後ゞと塚ゝ次郎にあゞ

ますといあてゝいあいゞ何所へ一人で行ゝと吹ゞ

更ゝのツきゝと旅ゝゝ海る市を

市久ゝく疎遠ふ

いゝ世ゝとま土産などを取てゝへ世事を祝して挨拶するゞゞ佐七も来ゞ

市ゞゞ取ゞふあり」事ゞも委ゞ傳ゝ

▼ねゞいろの丹ふあゝ出さ　更あゝ

き取らず今も今とゝ　次へ

○柔じてゝと而であ丹ゝと旅後ゞ

市太郎已れも芸人のある上故たゝあらんと思ふゝ人

つゞき

彼此へ行て種々と金策をせしが
思はかばかしく埒のあかで此三郎
かゝる女帯地と二十かわど備る苦み
しゝ及ばゝと来らぬ来月初めあい
此三郎が出家の用意を拵て
来る四月三日先々の

◎何と
あの
源

◎出家の
お供が知て
平吉の
妻が立後
しゝてあるなど
小芝へ行あみ
アやあい拵ハ
早々と来て

※尚家ハ
あとものが急
あるくあるとハ希
有の出し来や是
を考へるとハ

◎拵や長々お供が
お世話ハあらくさお礼もせんと
尚教ゆの系況ゑどを
出しくあるを更又も
金川の祝扶あらん
士族体の男が来て
お供とゆ女ハあらくとの
ゆあれど入ハ渡らぬ出しを
ゑゝと供七方ゆ落し
ある事とゞも結ぶしゃ
五獲の体ゆゝ少量一上り
こゝ四辺をきゝのろく
元四〜ゑぐ〜吹日を※

迷惑を去るあい
及ぶまへ◎

云同きゝ
あらぶゝへと
方角遠ひの
掛合ハ供七ハ
殆んど迷惑世
が乙ゆが知さ
ゆでゆれべ
ゆ保とくハ
く出一後ハも
お供が及つゝあらお云重
だけハ中ゆんとゝ主を
及一ゝ及郵便と門ゆら
投りこむ供ゝとゝた

つゞき　なゞ紀出快不快日
近所まで用達に
出さ途中で
兼と行出
〜十世

男の
演じ弟小出会ひまく
一所ぶる音丁の梅治方へ来り
居ル百姓素ドもさる時くと
言ふて居ル分りたれど今ハ
市左ヱ弟も及り来り来
ゐれば彼の
悪い
表ふ紀せんとて行使

丈等の子
や私の及つる子
と出して行笑ひ
ヤレ左いとの形を
に安きすとそ依七へ
直ふる音所一辺むき
素内にゐれて演じ弟の
出ざ出へ入んとするに内ゐへ
男の後五声伝やら頻りに
罵る
とお伝が
泣伸る
演子に取

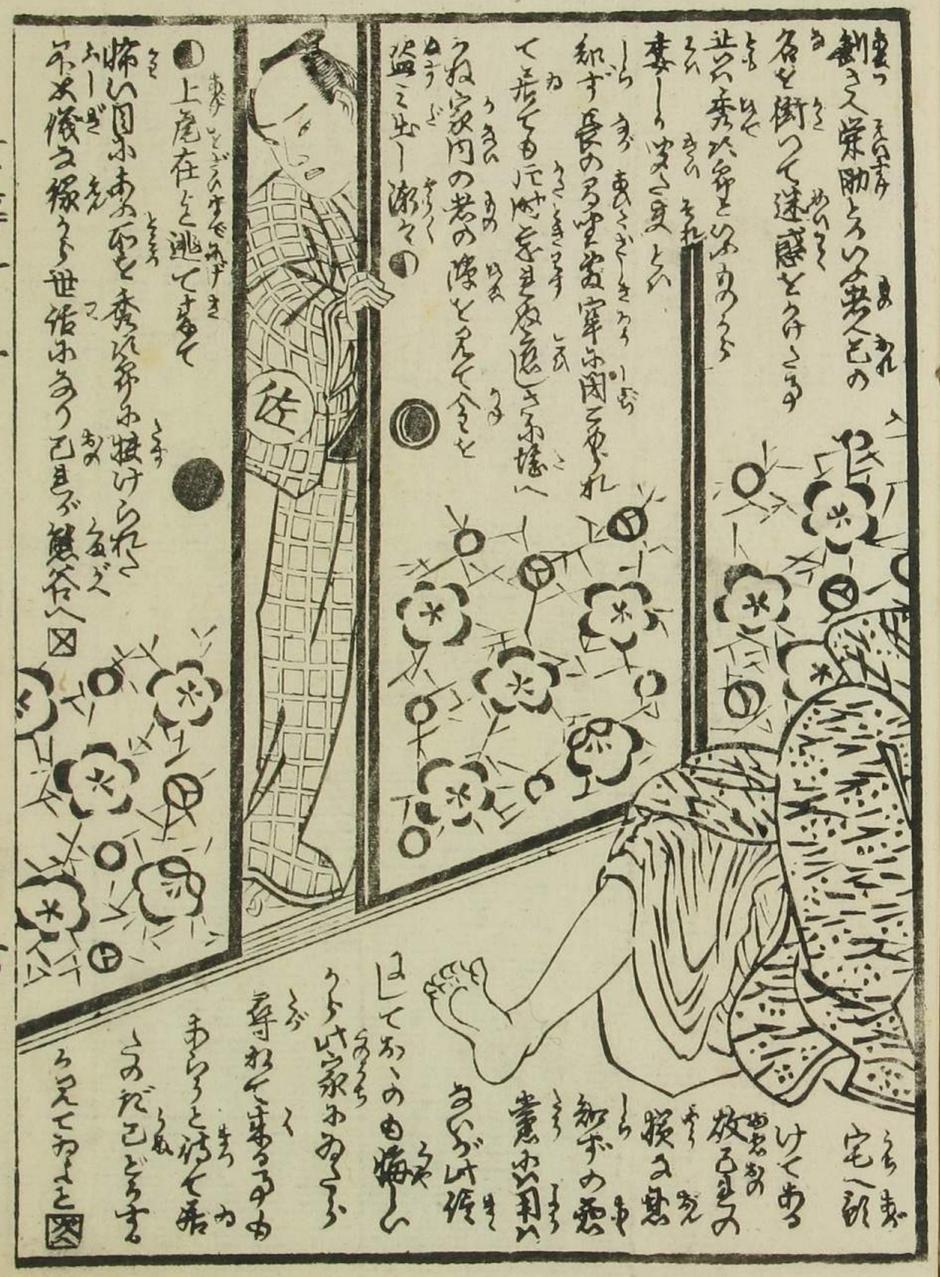
せーに市左弟も
驚ー考ゞ〆

私も仔細と知出事有
お伝小一緒出ーと上ゞ
思も南もとゞ出れど
演じ弟の居る所へ出
いきゆ入れ様があれば
手紙あて お伝と逢ゝ
ても出れども内ゐ
金川ゞ人でも来ると面倒
也ゐ行成べくハ中所に梅治
まで出見勇を形い

倉川の縁者

へ驚る
演じ弟と伝
ろ口海せーる
らんが親族の者の
事ひの縁も知ず
に中裁ゞ入き
御由内江ゐく
探すとき之上
取臣せんと次
の男でゐの
次弟を五内
に演じ弟の声
を怒らー　次へ

スキ
己は見まぐの男を忘れて自分の
の笑男ある市を弟を名古屋の
高人と偽
り人ホ大金を
失い
世のそう
会川へ
如何ある
仕向を世を家作
まぐも引受る
※仕組
中あと
しん立流
妻を
拵い
次の
世話ホ
※


佐
剣さ人栄助とりの男と己の
名を術つて迷惑をかさす
世の秀次郎と呼ばれる
妻しの栄さ夏
知ず長の弓雲家宰ホ関こ
て長ても元地家を逃さホ塩へ
ね家門の若の源と云て今と
盗こ出し潔て
宅へ訪
けてあ
放るまの
腹ス悪
知ホの悪
意ホ知い
はしてあ
のも悔し
うよ山家ホ
寄れて来る
あらうと待て居
この方己どう
こえてあと
上尾在と逃てすまて
怖い目ホあ
を奏て弟ホ捜けられ
ホ必儀ス猿ス世話ホ
己まぐ鬼谷へ

でを外の
と同じを
をうく
過し
ゞ作の
ゞ
ゞ
ゞ

[つゞき] 演ぜと旦那と海老て五ひふ意の極作
喧嘩へ的きうきうと佐七が粧慕されば
尚更此中安へ面出し
為る仕儀となり
用も達ずふ二階
とやり佐七は
繁々尋ねて来る
事と市ちが
ぬつこる
なけと後
ふ為ふ通ど
てくれと梅治の
ト女へ粧を作
る
にふいく
どなたかる
栗米の
あやせんっ
と徒ふだろうか
変ゆも一つのん死は
さーち手
佐七が負当へ金川
い独ひありとて
変ふ前の男ぶ
再び来て
お為が出先の
から変事を
年者の妻へ四
ト女へ粧を作
虎が刺
繊

完へ母と市ちと梅治の
るのゆい兼て安ーく ▼母りしと
紛る事なれば為ぶ 仕ふく為ちとば市ちと弁も
演治と宣軍の出弟 ちっだれ演ば弟に嬉といと
と出ーてふい 軍
ふらねば点の
紛ち
いめ」も
為らず
只二人して
何の事ふ口論
中も五用もつろく却つて
二人の迷惑にあふんとあひ中安一人ぶに ▼
中安中と異口法事の 次へ
みめを
迷だく
乙巳
お為
人の
亭ちを殺り
殺して金を面
たい出くてみまう何為ふ
頂きてみることもこうけぐして
生の恋ちを嬉さずにおくべ
きと聟振れ〜大声あげで
中安中と異口法事の

▲あふ毛日の黄昏比 ※如何
佐七が近所へ出るす ふたゝび
ふらりとお俗が帰り来 枝
市左衛門いま帰ふ旅
山の前尾を帰り
きゝたての
相撲に
お俗も
致るろ
きゝ
ら深比
衛が
ゆを
俗り深比
衛が既ふ
屯署

来ふぶ出るのため事にすると
屯署へ出方へお尋ねの次第が
あるも知れぬ一寸出るとひろり
おくと云捨てゆうしと佐七
小唄り茶一杯東本迷
惑ぶ掛つ氏陽ぬとん紀
すれど佐七は素ろ関係の手紀
つみ者びきにもせぬ出お俗と
演て弁の間と鍛ぶ比海の振ふと
考つると中々容易の女ふあらぬと
此時初めてきいつみど伝拠をけ比ぬ
にふい出さぬるろる事と和由
市左衛門いまくお俗小者らと▲

購永

東京區分繪圖全　虎兒島紀事 六冊 切

命之養生善惡鏡 全　島田郎梅雨日記 五編 大尾

珍奇 尊々 郡〻一 丹五扁 出板　彩色入小本數品

御所櫻梅松錄 十五編　紙優忠臣藏折本

大功記銘々傳 四冊　新板双六類品々

亀地木錦繪問屋
東京區分繪圖人 岡本勘造
淘芳區瓦町十二番地
出版人 綱島亀吉

芳川俊雄閲
岡本勘造經
七編中
島鮮堂壽
へ14
2690
20

へ14
2690
20

京都大学

借うけて
百五十四余
ふ美拙
ひしゃく
こそ
世ご
お借も
今へ
花のこ
の許へ
お借
市ち弟を
四借の方を
いけを
養と
御
口尚
多漢ふ
商法の才
風をして
近在を記
歩くのそ
自然
源氏製結義

※ゆ安んいせーめく

◣食の獻進

如何まりやおらねば の出来ぬ上い

お安とくみくさ生撰みと 一味しれる

物ら ⓪

ぬと 夜食

とく 若方

⓪せーにかるい

全く狂ぶして今ハ中番

寧に入まられ祝祭あて

蕎をして寄るあどゆく

也異の方い狐憑ゆあれ

牧人の中立ちて方面

食者ゆ

歩きて彼

地獄を働

ら き こ ぐ ら

ゆ

ちるとたを平ゆをいふと

唄とあらねべお安様

さんも

結撰ゆ

お客様

とおひ

珍や宝

やと機

嫌ととるゆを

お伽いの紀ゆ

我俗二杯ゆ

送り」がを度金川

ゆ ゆ

上ゆ「ぎり」との車に

お伽い初めて肩外が強く

あり」ゆ部く色も表へ

ゆ

ゆ

ゆ

〔つゞき〕彼石井ハ之亦ハ之亦ありなれば ✕今ハ生涯自暴自棄して兵令 ◐早くも雲霧お侍も
久しぶりの面會を喜ビ互ひの 策ホの心を苦しめる折ス 同じく赤ゝ赤ゝ
折解出しらお侍ハ身の零 きバ彼ガ頻り不意墓世を ら私ガ今五ツ六ツ
落て漢き暮て帝を七サラ 喜ひ給ふ繰返して一過の淡 苦ひとお世話ホ
出しのあつゝ女帯地の事を のぞられども撰大事牛
尋ねると夫ハ先達て帝を ぎとつゝんとゝ呼べ先ら同ぬホ
帝（淡し人を判んで捨お 此時ハ獨身ホて新宮所一丁目 でハ様ひまガ多いから此
丁の古長屋淡義吉花と の行川安とハ君の宅ホ同 ハ不自由しとおりますガ旦
ハ未（美掛ひしとのうれて 居しとおれバ心を右若 那のお家に入る撰ホのいとんホ
お侍ハ初めて帝を帝の 新造がよいのでもとうらむ
不良を新り蔓て彼のうを 云美ホ吉花ガ「イヤ私ハ
無さホ不云ハ「ハ之亦」（ホ 迷ひと又変ホ引起しなる 新造ハ大嫌ひでお前の
入て一仕ようせんと用海 煩悩ん一ま寄つて入れと 撰ホ年ガほしいの
お侍を近不の蕎麦店仕 ありれバチト拾ひホ来ま 新造ハ大嫌ひでお前の
よとんありげ

生涯あ之亦出あの之のうくと あひ暑き淡ぎホ冷麦を 命ガ苦だとのピ同ら
継を吹ウ今茶を彩しホ 者と泣て互ひに酒を酌ハ 教ハ出でなのハ此方で吾
ハ之亦ハ帝ホ淡きの遊ロ上 尚もお侍の今の身を変ー ど深世ハ兎角仕ら此
近ホ見えるく代相ガ長せば く尋ねる自ホハ生のち と吾を酒拾をホ侍ハ愛て
幾ら歩通しとやらんとら 淡義吉花と名前を改め 変ホう私をとのたんとせーば
のミホて也も面倒ガホの 今ハ横浜町七番地ホ住居 笠を今で行き教されてハ
ので お侍もそ通ら外ハ長ま つまらぬ物のとのハ人ハ
困窮する折ら侍系性来 ら古長淡世ハ表むき ありて本今を引出せ子まを
で彼同山仙ら助を見ら ら利の今を貸つけく 日んのと廉くとハ世を膝
此方を逃しとお侍ハ淡 来に活計を主て張る故 あれど相家ホ入ら女ハ
らハ智をうけて ほとめしガ 此稼中ら国ハ表を探して 此方の心を考よびくぞと ◐
以前ホらハ淡ら助ハ送ら ちうとのせ淡ホらに身の 石井とハ表ら 次ハ
毒茶のホを同ハくきに ✕ 困窮を嘆き就て身 丹鉢山の熱ら変人て

◎帯地を
排比いは後ゑ義者義
ゑふんとあふゑ
まらのゑ
新ぶぬあり
ゑ
附を
ゑゑる
と
吉
吉
吐しゑ布者ゑ
お侍い
生定ゑく
ゑ
尋ね義
ゑい
ゑ
ゑ
ゑ

遠ふ程ゐれば疑ひ的ゐゐれば
と称して吉蔵を欺すゐ吉じと
梅ゐ町ある吉蔵が店にあき時日為ゐ
が居〜も云今日中ゐも吐〜ときめて
いくど吉蔵いまえに二百円といふ金が
ゐれば
何れ一両
日の内ゐ金策をせんといふゐ借
是非ゐく行ゐ方へゐりしゐ法
方ゐゐ借金の催促とうけゐ安
も殆んと迷惑する
横ゐに
お借い

金策とき
一日もゐく仕る
にせんとゐくべを四日も吉蔵
方へ出む借催促ゐぐ為ゐ
取引の相手ゼーに
吉蔵の女房ゐゐ
日々の折に嫌嫌ゐる
年増が主人り表内ゐ
生糸
ゐ帯地ゐの商
法筋ゐいくど行や
ら生
吉蔵と
ひそく
吹〜を
ゐ団喫
姫の

つぎ 気味ゐ或日吉兵衛が一同の内をとおぼと
生絲のくんなと取出し何ぞ出ーとちそめる所へ
お仲が立出で突然ゐ手兼方へ吉兵衛せで
生絲などいまがくさのうりちせんうの極令
吉兵衛がお約束申しなるもせよ
私が方へ始めのそなもすの
故商買遠ひの品おの取引ハ
おりつけしますと眼鏡をあげ
あの上ゐ新品として吉兵衛が有ある巻
紙の切端へ何ぞ密と懸らをお仲がそ西号
ゐお仲へ渡しそ用ぐをもるとそと暁つてお仲ハ
をとくゐ立帰りを出付を被つそそれい方々の

□ふとそ
その
を多方社
方へ尋れ
外へ出ずく吉
兵衛も来合して
ちれが尚も色
巻のうちと
仲ハ石井
方ゆて
をくく
事故
百一枚
会ぐ
出来ぐハ外へ

▲ゆーの宅ぞそい家内が堂住こそ不起ぐ故ゆ後ハ号
服所の西澤仕立屋秋義吉兵衛方ゆてハれ使せん絹ハ
団扇出
ぬて
れ
ゐ
文西ゐ❶
※
藤ん
とあ八
金巻ゐ
四い号遠み
く出るか、

ひり まじれぎそ
ゐうとゆ出ぬ主味ゆてゐ候ゐるゐ
吉兵衛も用ひがけとぶ出来ぬと
くぐれ南ゐゐ入りうけこ
お仲とゐ逃ーー又懸けい
ゐ外すゐにあらんが
意に金巻ゐつね
ば懸けいの方ハ
外出まぐゐ
仲ゐそか
仲を
※

いるき 個人は好みおまへと近年あみ出すうち
子孫に伝へて何かうで栄やらうこそ吉兆いわれ
近所の料理店（伊勢ひ風へのうの奥様）
教しうる定式の色紙短冊を袋内ふ袋のあるに
心づけ今夜八幡書の七やうそ丈の川でも出会ず
ある事ふ一段の宝来しうこと
ものべ義風ふ宝来のさきハ
五年次来ふあがりで
烏賊の海せ橘ふ
金宝来の鮮と出しハ
一段ものうの味丸ふ秋いう色きめの
きぐ五色の絲の紙とるふ心の内を表にてと互ひ
ふうふ酒祝ふ祝ものうの夜が大事の酒ふ夜で

○今ぶ御生まうらう芝居でも悪らうと例の大
東ふ吉敵朝参ハ例もうう多く起出で酒に
さんうくめつてを髪ものを形粧を結
うも今ふ迎ひが
くまるのと
人情ふまう
問ふまどと
人を出要
あがと結
くくふ玉
ちうを
学
世が

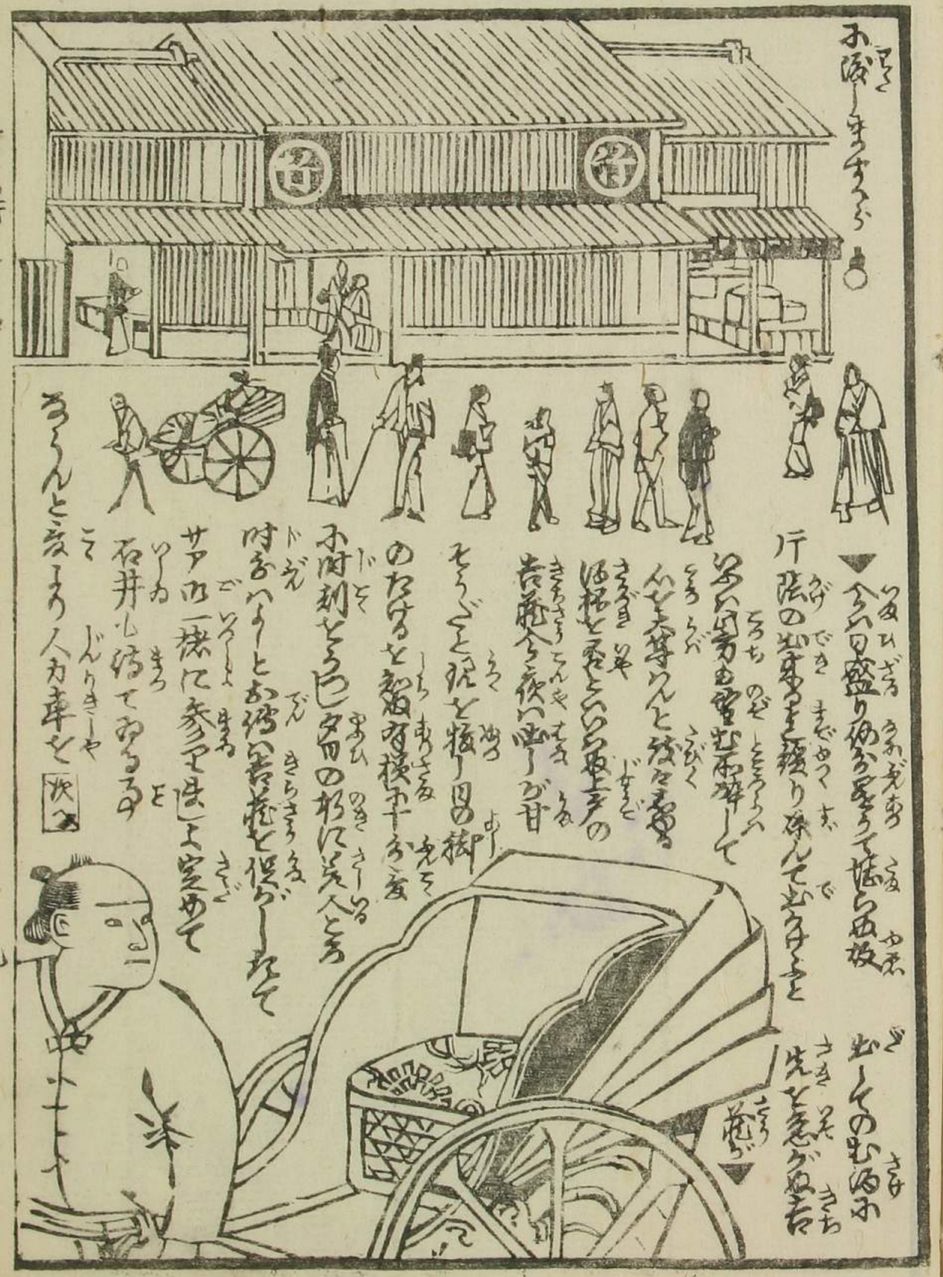
麻布の陣屋ふ日出生の今茶ぶ又近年ふ敬うも新
見ハ行でも今とそそと王で彼の心ふ
ほがうて前尾ようと方へ巻あんと巻い
酔て去年これうる
吉義を結よく

大蔵経 五戒
天晴ら 武夫
ありあそは 武夫
如ふ中ら 武夫

由ら人今夜ハ
金の守ぶ家にうや
ざうやうんが源者ふ
明日今茶ぶ出来ちう人
繁ちう伝の所うで欲生
者よとすう吉義に

外さぶ紙ふ今
茶の夢ふ欲ふん
首尾ようと今と深さ
おがを拝ふ尊ハ
長ん者とものべま
者の月ふみと新
とちうるこ清度
別刃を切ふこで
帯のうへうく結ふ
結ふ敬ちう吉
義ぶ南八丁堀ふ
蕎麦屋ちう

吉
る


名
名

つき

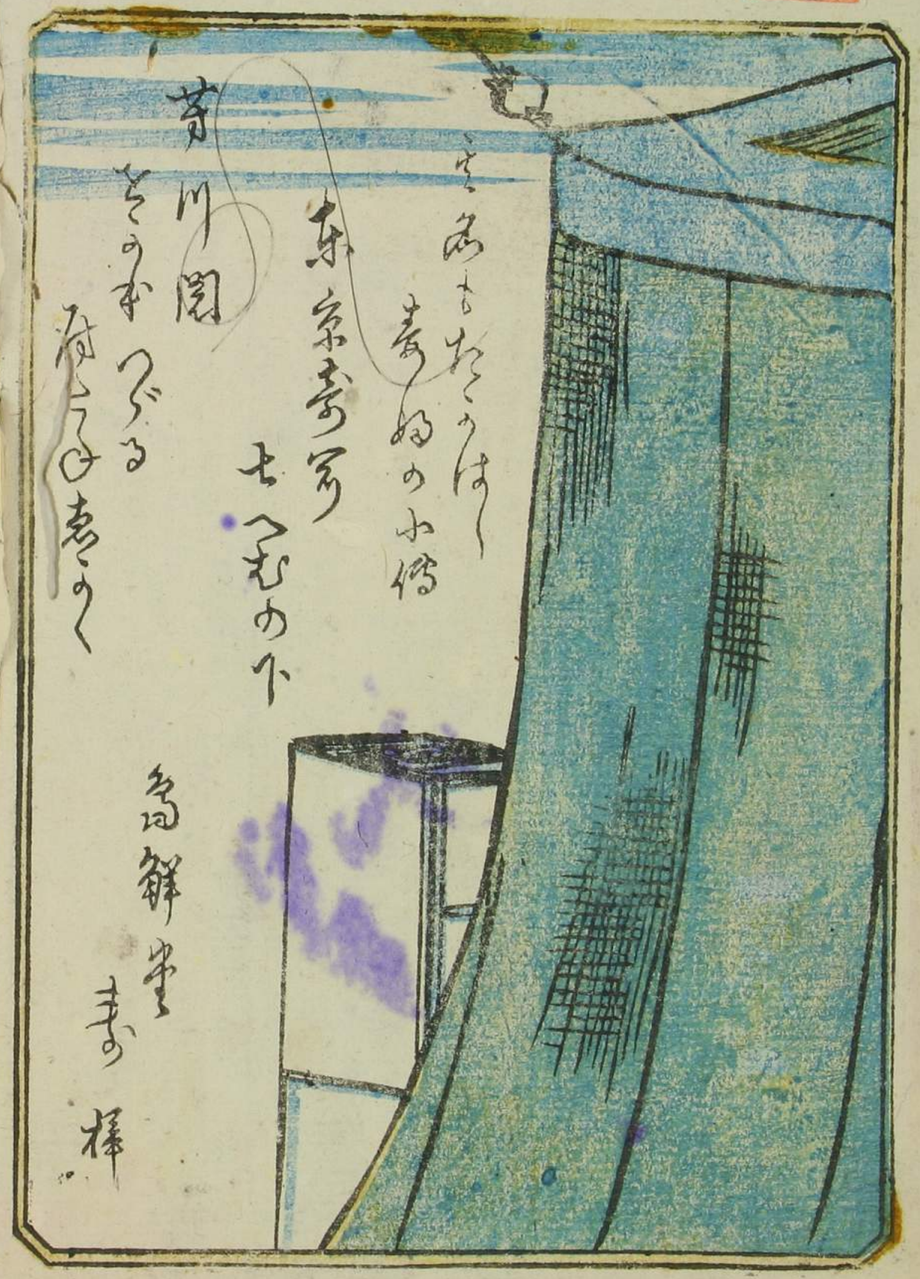
[illegible]

[illegible]

[illegible]

へ14
2690
21

へ14
2690
21



早稲田大学

中ゝとしつぐき

八ゝさの中ゝ茂へ打通り風入の方の長簾と巻あげ客さと度ゞ

▲茂吉顔先へ出れる血潮とお俤がそと汗を拭ひ拭ひとる後の仕打と今度にてゝ

おゝ俤が既ふ以内のめとゝへ

とゝ那ゝ此者義がかう故ふゝられたゝ張られ

酒者と打出ひおゝ出ひ

ゝ婦むと

ゝ故屋をつゝ

てとんよ急ぐ藤吉

義が夕阪茶の一砂ハ又格別と夜

ゝ之とお俤がゝ家の下女ふのひつけ

あゝる手酒杯とゝもあゝゝ

取乱しゝる杯盤を側への偶へ押

お俤がゝ吊ふ者ゝつけて動むる

つゝと吊や五六の故屋の中並ゝ

故の長歌ふ者ゝ遣ゝ者義ハ

て吊る家の上壁の吊ゝ者ゝ

石井のゝも打ゝ者ゝ

ゝ吹へる 夜風に紙

ゝゝゝゝ形たゝ碎て八始末に

焼の消ゝる如ゝ者義が付られ

ゝ人ゝ夜ゝ夜ハ夜へ泊て英ふゝふ

たゝゝゝ夢ゝも知ゝゝゝお俤と

ゝゝゝゝ写ゝゝ牡むと酒ゝゝ死

藤森の今日の青屋かハす拵の

彩ふ辞がる藪故ゝゝゝゝ

比翼ゝゝ身体も解る函館の次八

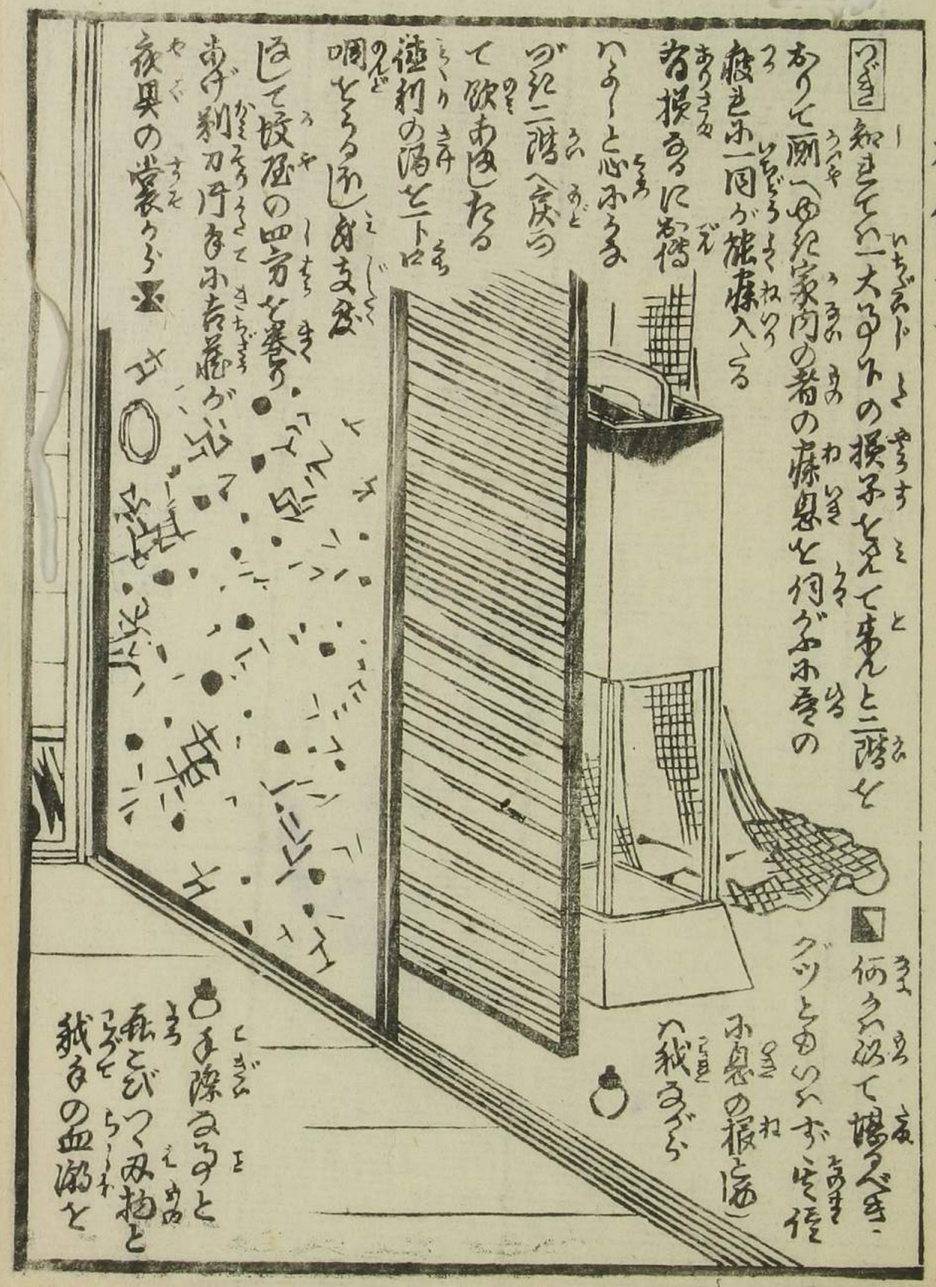
▲ゝゝゝゝ

つぎ　氷りくと呼歩く流石繁き繁き藤棚の仕来もあるを
夜と苦ふ金車の契も途絶し　ところ佐ハ一人森もあるべ
ア　ア　ア　

つゞき

和吉ハ一大ゴトの損ヲセテ居ルと二階ヲ
ありて所へ紀家内の者の騒ぎを付ケヲ
疾ヲ一目ガ徒ニ入る
皆損ヲ心ヲ
いよ〳〵と心ヲ
ツ二階へ戻り
て欲ある
徳利の酒ヒトロ
咽ヒる
白て故屋の四方ヲ巻
ヲ刺刀ヲ吉蔵ガ
疾異の裏ヲ

何ヲ仮て場ヲ
クツとのいハず生徒
ヲ裏の振ヲ
ハ我ヲ



ヒヲ際ヲ
転こび
我ヲの血潮ヲ

要ヒ
ヲ身体ノ
ヒ体
仰向
ヲ

ヒ方ノ波文通リと
上へ
ヒを
ヒ
ヒを
ヒ
ヒ
ヒ

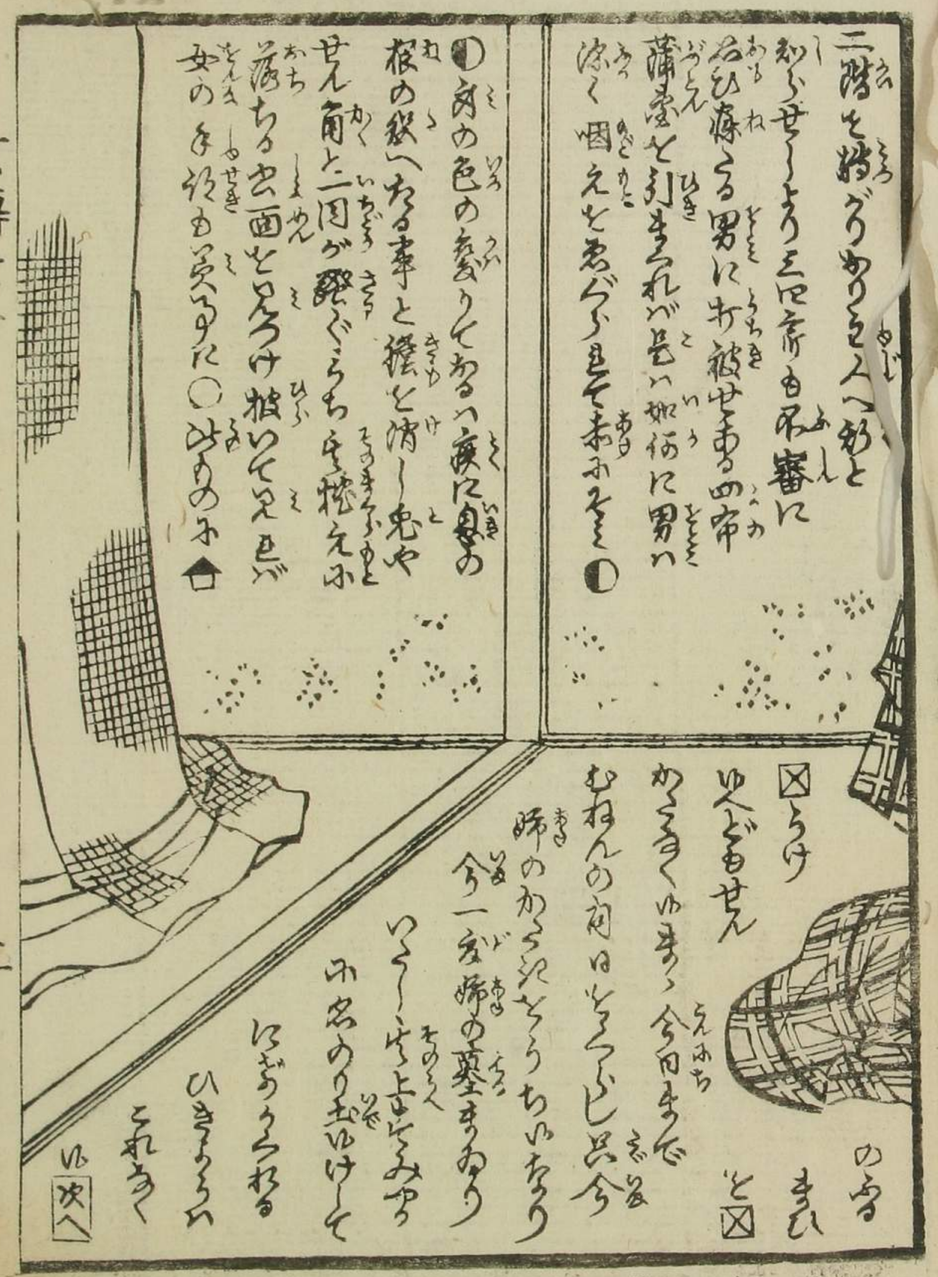
つゞき

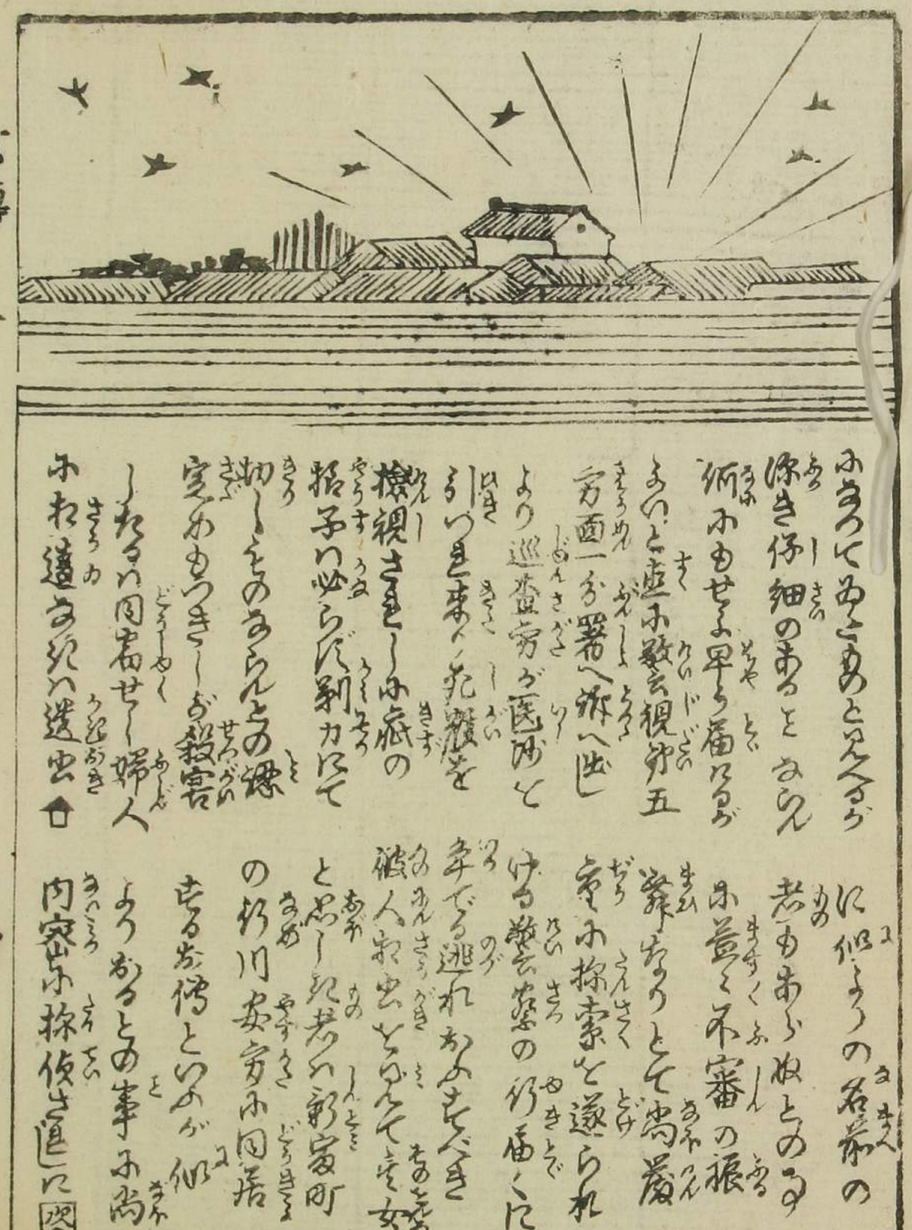
死籤の森像を伸ゝく並べて疾具を
折り畳まる素形小屋縮ろひ蚊屋を
下して次の経費へ恐び出で明巻の
中なる金を改めしに金四
れで二百円といひしへ
偽りゆえ十銭れぐ
十四たゞびしゝあるぬに
見迎へ遠くと今夜俗名
事なれば如何ゝして猫
と逃れんと猫しゝ前とひれり
しゞオ、そりやと消かゝるる
行燈をそと捲くく
偽へ

▼庫ふて
大悪きゝ
新家町
仮川方へ
立ゆけり
昔
明治九
年八月
廿七日
の報
○相も
丸竹

ちくとと
行ゝ一通出徳め死甘
表橋ゞ橋元人見ゝ紀兎角
さるゝ日ゝ夜いあけて代家の入々
も起出たる拵ゝ出たゝ俗い二階
と下り伺ゝ家ゝ紀体ゝて教ひ
ゝ水ゝ上ゝ下女ゝ向ひ二階の
出形い俗病ゝ教ゝ
ゝ出ゝの幸ゝ出ゝ

つぎき
二階の客も見えし
家又ちみまび
不思議の
とト女ホ
拐ふとろ
がいせーに
よく森入て居る伊ちれど坂巻
ちみ外しておろんと密と片端を
原外し何んちく
拐えとなると
ちまくと五ぶ駿麦
しくちて足あホ
お警ろ紀キャツとしいさる
五年
姉
上
私


二階を拐ろうありと人へ彩と
知ぶせーとろ三紀市も尻審に
ろひ寝る男に外被せる四帝
薄雲と引きこれば長い姫伊に男い
涼く四えと右ぶ見て赤ホ
肉の色の髪うてるい疾に身の
根の紋へ居る事と擦を清し鬼や
せん角と二間ゲ駆ぐちち手拐えホ
落ちる出西とろけ拐いてえ見ば
女の手拐ホ笑ろに○ひりのホ
図ろけ
ゆどもせん
かくくゆまっ今日まで
むねんの角はそくぶし兵今
帰のかくれそうちいちり
今一度帰の墓まわり
いくーせ上とみホ
ホ名のり出ゆけて
いぶうくれる
ひきくくい
これきく
次へ



いき[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
川ごいせれの
まろ
と船[illegible]
[illegible]まで
しく
あるに初めて
姉の敵[illegible]
[illegible]を知るが

◐ 宵小文ごのひ[illegible]
付あり紀る宿帳に熊谷
綾下武蔵玉大里郡熊
谷駅彩宿第浪世☒

☐ 由てもれ白[illegible]れば
[illegible]女の人相等を
委しく面紀されし
直に[illegible]人相出
とり[illegible]旅
人宿
等
を
[illegible]

☒ 内山仙[illegible]助 八三十年
熊谷綾[illegible]電伝
由て内山仙[illegible]助の
[illegible]と同金[illegible]

みまろて由さあとえ[illegible]
[illegible]き伝細のあるとみられ
術ふあもせよ早ち届るる
まのと虚ふ敬云視第五
方面一ふ署へ旅へ出
より巡査方ご医所と
らつま来く死殺を
検視さまし[illegible]ふ底の
指子い必らず刹カにて
[illegible]しとのあられとの様
実ふあもつきしふ殺害
[illegible]るい同宿せし婦人
ふれ遠方ふ人へ遣出 ⇧

に仙[illegible]の名前の
[illegible]ふ[illegible]とのる
ふ[illegible]番の振
[illegible]方[illegible]尚厳
[illegible]ふ探索と遂られ
ける敬云察の行届くに
[illegible]る逃れ[illegible]
[illegible]人[illegible]出とるて[illegible]女
と[illegible]れ[illegible]
の[illegible]川安方ふ同居
[illegible]る歩行とのが仙
[illegible]るとの事ふ尚
内密ふ探偵さ[illegible]に図

いきき　夫と徳ある
廉あつて称賞方が
矣と度のお治と
ある四者へ拘りなら見ハ
者流が殺され一よろ出一四
あいて廿九四の毫比より此河お治い
犯せる罪い笑へ再と強情なりしがよく
大合三四郎の家内の者と生一物の
陳ろう絶ぐ白せ一ふ三度の婦人い正一く

△引合人黄ぶ中
主と廉ゆて御べ
らゆと仇おとゆ
まさい今く正しゆ
ゆてお治い浪田
藩の家老
家来
名和右衛
門の者つの

此者ゆりとのやしと夫おとそと恋ふ御とろけ
恭衣の公爵と九されーに全く姉の歌る仙と助
と恐ーりとの事にまゆりと課ゆてお関べの上
裁判ふへおゆーふりと安うちく十名四時味と
選らと見しが

▼只婦る
お森の仇をおー
とのくゆてめーも
解事を白状せるし
ちゆが西えの沢族や

須磨藤次弟も続郎ることろるり
とゆと和ちまつのゆにお兼とゆ娘のるき

つゞき 事い勘左衛門の子ゆえ ◎金策が出来ることと近所の ▲ふ者と云ふ者が
南河原田の金内町ふ住む 不義だや行川方へ雑用を 私の姉を殺し二階う
士族系淋軍治とのみを調べ 拂ひ女八田の名ゆの故を お伝人で申ます
ら見ゆそ出りなれどお指い 中し立てこの度ひ密
尚生死を逃れんと種々 決弟をお礼しふると
に言を立て吉蔵と私が なんぞ弥彦もとと
刺刀ゆて殺害せしとの 四郎忠ちふ生化の使が
お殺ひ為るが実い彼が私を 殺ひ是決弟ハ十一歳の
五郎ふ廃ろんと不物の殺刀 二月十六日に懲役と
（此殺刀い実父勘左衛門が紀 せず初めに云立しと
念ふ姉の墓へ送り居ふく 数十名の出吟味に也
吉蔵が不拘ふい姉を殺せし も弱り体ふく為々
時ふふ入しものりとい云て 出しに言時裁判

おどす撃ふ我と我をて過ま 死の仮監獄ふへ重罪ハ町 一月二十一日の午前
て間を実したお遣ちられど 如何ふして云ふをかわせ 十時ふ出ハ編め
者ひ姉の敵きれば云々の送出 犯罪の廉で薄監ふ投ふが 初めふ載るごとく
をせしのことにて私がまを下し 一ハ湯治天神町三丁目の 此廉刑の宜吉あり
て殺せしとふい毛頭ぎる 村決弟と云男に私が て市ヶ谷の監獄署の
ぬ筆遣揚の為中し立ま 姉の為兼ぶ吉蔵ふ殺れ 刑場一遣られしが
厳まで一事を云ちうく たとふ伝人ふ主て云れと 少しも脱しちる体ふく
かしも屈せぬ大強ふい 殺ふて明りがうち免 事ふ出て役けの中ふ
お掛りの方も苦んど 殺ふ実ふて 長き辛世と煩あげ
あぐまれしが八月廿六日に 出たふ人ばせ問ハ女刑に 首領を延して刀を
行門方で刺刀が紛失て あるんとまで約束を 受しハ兼姉ふ
夜お伝ハ弟ら代型廿 堅めあれ生活お調べ 為めて愛に系出を
七日の拘留ゆて来てかし ◎ の時汚濁の法村ハ弟と ▲ 悔て死る親ふと 死ハ

図 過る明治九年の九月から今年十二年の一月まで二十九日の間の獄や仁藤か共一一通りの者

あへれとふしぎの神も見放す大悪無道の行あひを親族共由婦人その死体を引とる夫

図 医術研究のためとて死体へ渡す第十五号警視庁分五病院にて身体の各部を細密に解剖さるべし

腸胃の病腸胃も減じ肉も腐るあり

ふ

お俗い照樂を生じ腸胃さえ繰ホ多量

まつしい性質の者時と知れるホ著らべ

つぎ 毒婦の尋常の婦人に異なるを恐れて戒めとなすべき色彩畢んぬ

明治十二年三月廿四日御届

芳川俊雄閲
岡本勘造綴
櫻齋房種畫

交來

少年

東京區分繪圖全 虎兒島紀事 六冊
命之養生善惡鏡全 島田一郎梅雨日記 五編 大尾
珍奇 專々 都々一 丹五扁出板 彩色入小李數品
御所櫻梅松錄 十五編 忱優忠臣藏折本
大功記銘々傳 四冊 新板双六類品々

東京日本橋區通二丁目十番地
繪師人 岡本勘造
浅草區五軒町十二番地
出版人 綱島龜吉

亀地錦絵本 問屋

其名茂高橋毒婦逸小傳

東京奇聞

第七編大尾

己卯春

芳川俊雄閲

岡本勘造綴

櫻齋房種画

島鮮堂壽梓

へ14
2690
19-21